



4424  
13









4424  
13

大正  
4 29  
14/2/21

萩原 秋

ついでに

中

# 潮流變じて

自己中心明治文壇史(十六)

江見水陰

文学藝妓

明治三十六年の初春

陣屋横町の生活は非常な賑やかぶりだ、  
自分の最も全盛期であつた。宅は谷活東、



# 2中

事にあつた。(幻花の芝居は芝居通では無く、  
 事ある器時代の遺跡荒しと疑つてゐる)  
 明治三十六年の  
 一月二十五日、相州茅ヶ崎で、ソコソコ、  
 セロソの本讀をするといふので、自分は午前  
 十時半の汽車で出發した。川上は品川の出雲  
 屋の牛肉を~~買~~買賞してゐるので、  
 茅ヶ崎は不自由なといふので、種々取揃へて、  
 自分で擔いで川上の別荘(萬松軒)  
 川上の知人は、金尾文淵堂が來訪してゐる

伊藤、林、玄川(和)の三人が同居してゐる上は、  
 狹衣、葎水、花舟、紅蔭、天仙、佳水、靜江、  
 花ふとが、交代り、時々とは群を成して、  
 殆ど毎日の如く出入してゐる。  
 内に入るは相撲を取り、外に出るとは花摺を  
 試す。幻花ふとは元日二年始の事々、  
 その足で大井の権現甚(今は釜道の工場と変  
 つてゐる)花摺を行(山を崩して)  
 大勢押し押しかけ、幻花が摺り込んでゐ  
 る穴の中へ、大の屍骸を投じておる。



中

ので <sup>自分な</sup> 船で暮らしてゐる茅ヶ崎館へ <sup>真</sup> 奴の案内で ~~先登~~ 先登した。

春蘭はる如く非常な感下の快い日和であつ

た。二人で語りながら砂路を歩いたが、六時

までも真奴は、デステモナ（靴音）の役で出

るのをイヤがつてあんなので、自分は道途 <sup>サカ</sup> 奮め

るのを <sup>ウツ</sup> 急がふかつた。

茅ヶ崎館は他は泊り客は一組 <sup>ウツ</sup> しかつた。

するで川上一燈で借切りも同然であつた。藤

澤浅二郎、松本政雄、藤川岩之助、山本喜一

A 10 20 清江三河内無因巻

磯野平二郎

高浪定三郎

服部谷川、野垣清一、津坂幸一郎、長谷梅不

郎、新左直頭等、その子方として其の

洋行しれ <sup>杉原君三郎、富田十之助、それや、狂言</sup>

方の観丸 <sup>高瀬郎長集</sup>、既に到着してゐた。

その市川九女八の守任月暮が、附添の娘

と共に来て居つた。古い女役者 <sup>今夜</sup>、新しく女優へ移る <sup>意思</sup>

この他に大隈の、高田實が、門弟の五味国右

郎、山田九洲男の二人を連れて来る。といふの

で、その身を本 <sup>見込み</sup> 讀む待つ <sup>事</sup> 事事成つた。

その間は自分 <sup>海</sup> 海岸に散歩に出た。その

意思移る  
あつた。

No.

No.



中  
4

砂山の上の江の島の方を遠望すると、過去の傷  
手を思ひ出て、感慨深きが、はるるんぶか  
つん。

そこへ小松を押し分けて、月華の附添の地  
唯一人で来た。彼の女は、けしが自分の故郷  
の新島の柳見山附近。似てゐると、この感  
慨を充ちて語り出した。然して又自分の小  
説を破くべし。(文藝俱樂部所載)を愛読し  
て、その巻中の女主人公は共鳴するところを語  
り出した。

A 10 20 青い 三四五 雑誌

No.

これは後を知つたのだから、け娘こそは、新原  
で文藝雑誌として名高かつた庄内家の川東で  
あった。(後)内田静枝の名で、オセロ劇を出で  
た。日本女優優最力の貞奴と替り、け人の名目亦  
忘れてはゐる。一時永井荷屋と関係したことが、  
旗幟を樹て藤間静枝)今は藤陰會の新舞臺の  
この夜、高田孝は到着した。そこで直ち  
自分が本讀の礎を直して、脚本を朗讀した。  
明くる日から直ぐ警方にとりつかれて、自分  
は、~~滞在と成る~~滞り成る。

No.

三



5 中

五頁の「女優の懺悔」(七)と「徳の女」の記者の語つたものなり。

(あま) 妾ほど不遇なものはありません

いと愚痴を雑せてお出をすゝと成程不幸

ふ身の上だといつて大層同情を寄せて下

さる懐疑のほれたのといふ譯ではあ

か若親切ふお心入の喜の胸にヒシと堪へ

夫れより猶々江見先生が慕けりくあり替

古の間々は勿論昨日さへあはれ先生の例

を羨す種々の事を聞か申したり又

No

~~おまのの載つた文藝の二月號からいふとあれ  
の川上は長谷川天橋の  
おまのの考証文が  
おまのの西澤  
おまのの~~

No

其間俳優(高田)藤澤は勿論、川上  
夫婦まで——自分と静叔とが怪しいといふ  
噂を立て出した。

これは次の「国民新聞」の記事を参照

ありたい。(明治四十三年三月三日の紙上) 第二

A 10 20 青い三河新聞



6中

ど、川上女は事が疑つてゐる。(震の年  
二十餘年目で  
真奴と會談した時、事が女事を  
して冷められた。一度諦解されたがモ山崎目

オセロ銃殺さる

明治三十六年の春

オセロの總演は廣町俱樂部で  
二月十日に行けり。この帰り、夜に入つ  
てツグで有つた。川上が食事を傳へた。

No.

をする様ありきと一巻の俳優  
連の喜の此仕打を見て妙の感ありま江  
見先生と何か可笑しいとソふ様を  
立てたのです。迷惑ふりは江先生でし  
れ(下巻)

全く迷惑千萬で、いづく自分  
天で一同は受けおかつた。それで後日  
件を有の傳と題して小説と作し  
陽(明治三十五年三月)の  
突罪と知れて、高田の藤澤と諦解したけれ

A 10 20 書山 三回 演義 雑誌

No.



中

7

一流の外交手腕で、害を乞へば、才せ口は  
 土肥春曙<sup>は</sup>脚色さすのが本流で、昔は洋行  
 者の<sup>て来</sup>が、土肥より一花咲かせん  
 べが、それを自分の方へ廻し、土肥と  
 して心算<sup>ふし</sup>の不慮で有つたらし。川上  
 も亦<sup>す</sup>衝きぬと思つておれり、それで不取敢  
 この小宴の下、春曙の不快を釋き、掛つた  
 のであつた。(その後、~~山崎~~山崎春<sup>の</sup>  
~~山崎~~山崎春<sup>の</sup>イムレットは、春曙の名  
 を列ねて、矢張り角ケリは着いた。)

No.

ふりて、自分と土肥春曙と、落語家の三遊亭圓  
 三とを連ね、本原店の中華亭に行つた。  
 その時は川上は金子男爵の午紙を出して、土  
 肥は示<sup>し</sup>後。  
 この通り、金子さんの口より内意があり、  
 だが、<sup>いふ</sup>近手持事、必<sup>く</sup>か、天賦の光榮は浴す  
 る事が出来るのです。その時は是非貴郎の脚  
 本をお願ひ致します。  
 これは勿論然うして下話も有つたのであつ  
 たが、土肥の脚本云々と持つたのは、川上

A 10 20 書山 三回 落語家

No.



と中

十一日明治館にて、いよいよ蓋を開けた。  
洋行帰りといふ事や、貞奴(初舞台)といふ事や、  
4円の脚本料(東京の)

ふだの問題を教へりして、非常な景況を  
有つた。

新聞記者招待は第一日であつたが、最後の  
肝腎の幕切は、兵士(自田)イヤゴ(伊原)の  
よ向こそ一斉射撃をするのを、兵士(伊原)  
廣目屋の傭人はふりて、キツカケを聞き入て  
川上のオセロ(空銃師)を射撃したといふ  
大失態があつた。幕の結つたのは自分  
A 10 20 青山 三回演劇団

舞台へ駆付けて見ると、川上は傍流と  
て、その失態を口にするが、  
その失態を口にするが、

その失態を口にするが、  
その失態を口にするが、  
その失態を口にするが、

その失態を口にするが、  
その失態を口にするが、  
その失態を口にするが、

その失態を口にするが、  
その失態を口にするが、  
その失態を口にするが、

その失態を口にするが、  
その失態を口にするが、  
その失態を口にするが、



# 中

号

を翻案し、能く程は、原文の妙所を譯存せんと試みたる事あり。然し、到る歐洲諸国にては其名優俳優キスピアの某劇を讀むを、聴くは従く之を引替へて、我國の観客は只管舞台の上の動作のみを觀るを専らとし、更に其科白の優劣が如何なる、さる名作を翻案しての無益ありと思ひ明めて筆を拵どかり。然るに今やこの日オセロは觀るに其要所を以て到りては、勉めて原作の金石を譯なし、

No. \_\_\_\_\_

五

号

掲載——地振り、新聞名を逸したるを遺憾とするが、<sup>多分</sup>都の讀者の内は、たゞ一ツ示して置く。  
 (前巻) 序幕を東京とし、原作二幕以下を台湾にせりぬ。尤も妙なり。特におオセロ(山崎武官)を薩摩武官にせりぬ。此等は、頗る老手の考案と贊嘆當りず。世間の真摯者流の如きは、翻案の科白を原文と比較して、兎角の批評すべし、僅り曾てセーキスピア、又はシルレルの名作

A 10 20 青山 三回原典及巻

No. \_\_\_\_\_



中

口

心を生ぜしめる二人對話の長帳場を、最初の  
 は壁探して書いたらであらうな。すゝと川上が  
 納まらず。  
 口 こゝが肝腎な所ですらう、成るべく原文通  
 リして下さう。と野田の言葉。  
 口 けれど、今の見解の程度では、  
 聴いてあるまいと思つて、と自分かえつん  
 づを打消して。  
 口 東田、私です。と、とんち半疊の来たるビリ  
 としきせん。キツと持切つて見せませう。

No. \_\_\_\_\_

号 6

谷響の痕ゆく、中々僕おどが及ぶ可き。  
 非ずと既に昨日同行の標本破望の語りき。  
 是程。翻案は洵に軌近脚本の最上乘と僕  
 は鑑定するあり。世間高層者流の批評は  
 打捨置つて然るべし。悪く言ふべし、  
 つて見せろとの一言も十分と信じて候(下巻)  
 現今ほど着客がセリフを讀聴して居る時  
 代ぶり。殊に西洋物よりいと非劣の悪感を  
 抱いて居る人が多かつたので、自分も其点  
 は非劣の若しして、イヤゴロオセロの癖  
 670

A 10 20 青の三四五

No. \_\_\_\_\_



中

川上は傲語しん。

可成り

然るに初日が聞いて見ると、大向ふが動揺  
 した。大いなる事ごとくおつたのかい。それ  
 對してシツ／＼と叱する声も少しは有つ  
 るのだが、川上あちが北して二日回つたは  
 少からずでカッとした。つりり取神の  
 原博と同ドの成つたのは滑稽で有つた。  
 十五日は自分の名を二百餘名の總見か有  
 つた。文士觀劇業といふ名目で谷川東が主  
 と成つて催したのを、その翌日又る名合せ

無錫博多館の行接を待た

A 10 20 著 三國河津博多館

て三百餘名を日野家から入場させたのであつ  
 るが、そんな事をせずして大入ふりで、我々  
 の連中は餘り歓迎されなかつた。(今下りるは  
 勿体ない話だが)

この大当り十八日あさり、小松宮殿下遊記のた  
 三日間休演しつた。大分景氣を救つた  
 りであつた。

川上からは、ある末の午内は全部入ふおかつた。  
 前後料回す且つて、七百円現金だけで受取り、その  
 他は茅ヶ崎館の滞在費せきは充てられた。



1  
2

川上一郎は、明治廿年秋樂の後、大阪其他  
關西方面をオセロ劇を持って押し廻つた。  
自分も同行せよとの事であつたが、断つた。  
然るに川上の弟で（磯二郎の兄である）某  
といふのが（これは平常不身持で、者二郎  
は義絶されてゐる）といふが、川上も自分  
の偽印を借用して、中国から九州方面の各劇

原稿停滯

明治三十六年の夏から秋止

事で、それより終つた。  
その頃の七百円は一時は行り、大分効果  
有つたが、何處か（？）千秋樂當時では、總べて  
で——二十七日の伊藤の母の急病で、伊  
する旅費、その支出してやれぬが、ついで  
新編の紋腸を曲して、漸く出立さうといふ有  
様。  
竹書佳水は、明治廿八年の二月二十八日  
有つた。







中

契約であつたが、雑誌編輯の都合で未掲載の原稿が、  
 題で、つんのむが、矢張りその頃千円のもの原稿が、  
 問へたりが、是れが、  
 あつた。  
 併し、それ等は順次発表されたが、今その  
 主たるものを並べて見ると  
 鈴木島（少年世界）島流し（右陽）銀笛  
 子（右平洋）花と女（文藝俱樂部）傳  
 車端（右陽）神鳥（文藝）雪ヶ谷（中

No. \_\_\_\_\_

三月十日で、その日は、文藝への寄せられたり、  
 つら、後、この日は（明治四十四年）帝国劇  
 場で、  
 市川高麗蔵（行）松本幸四郎の補遺  
 依つて、  
 その他、種々博文館へ原稿を持込んだり、  
 雑誌へ未掲載の原稿料が千円以上を、  
 持つて、  
 自分差控へて、  
 毎月百円ばかりの原稿は引取ると、  
 月刊社の

▲ 10 20 青い 三河屋書店

No. \_\_\_\_\_



ト  
5

五月二日、谷川東は、長野新聞に入社すべく出立しん。

八月十一日、田村松魚の渡米するの、橋濱まを見送つん。松島夫人の他、佐藤露英女史が見送つてゐる、帰途二女は曉まじく横濱停車場上の洋食館に入つてゐるのを見ん。

この露英女史は露伴門下ぶで、單まそひのけの關係で見送つたのと思つてゐるが、松島は帰朝するは露英女史と結婚しん。そのが田村俊子とて、直ちの女流作家の身である。

木村雁太郎の紹介で

学世界、美術家の妻、(女学世界) 獨鈿の湯(太陽) 龍の窟(中世) 孝

一度停止する後、~~あつて~~ 需 める應

いのは、少年世界、~~あつて~~ 暑中大探検、文藝

へ、地底の人、~~あつて~~ 山下の家、~~あつて~~ それ

から、三宅青軒の、文章、~~あつて~~ 竹径路、といふのを送つん。

地方新聞の小説として、女海賊、~~あつて~~ 山陰

新報、~~あつて~~ 大暗礁、~~あつて~~ 山陽新報、~~あつて~~ へ送つて

るん。

A 10 20 青い 三阿原紙房製



中  
6

八月二十六日の各新聞は、紅葉谷篤の記事が載せられたので、吃驚して自分は牛込へ行つた。それは、<sup>幸しよ</sup>訃傳であつたが、併し此時分は既に<sup>胃</sup>痛で再起覚束ないとは知らせてあるのだ。(紅葉全集が賣れたことは思はず。それで死後は慰念の心か、<sup>たゞ</sup>知友で<sup>金</sup>を<sup>贈</sup>るべく、それこそ割当てられ、<sup>ど</sup>いてあるのだが、それはなほばあつた。自分等文士側は原稿で薦書する位であつた。

No. \_\_\_\_\_

五

どういふ事情が有つたか知らぬが、自分は見送りに帰途の二女の饑<sup>い</sup>く<sup>い</sup>を<sup>共</sup>に<sup>し</sup>てゐるのを見て<sup>い</sup>は<sup>れ</sup>た。非常に不快な感想を持つてゐるふかしの。この夏は、能く一家を擧げ、桐ヶ谷の氷川の麓へと遊んだ。五反田驛は車が設立されず、京濱電車も無かつたので、品川よりは徒歩の方が却つて便利であつた。大崎、五反田、田園ボウリで殆ど家はふく、それ故に、<sup>キ</sup>は<sup>桐</sup>ヶ<sup>谷</sup>を<sup>歩</sup>いて<sup>行</sup>つた。

A 10 20 清山 三河原源次郎

No. \_\_\_\_\_



三芝居の事蹟

明治三十六年の秋

自分としては、博文館と縁遠く成つたので、  
 家計は非常な苦しかつた。すゝと筒井半峰の  
 紹介で、国民新聞の支筆平田久が、九月八日  
 の訪問に来た。それは新聞小説を依頼されて  
 いた。どんな好むか、つらぬか知れぬか、  
 (但し一回二円?)十五日の紙上より、海老  
 の宝庫の連載を依頼された。

A 10 20 巻 三回 海老の宝庫

死去

この前日は九代目市川團十郎の記事が各新  
 聞に出た。同日は新俳優の元老福井茂兵衛  
 が、櫻木雪夫といふ青年を同行で来た。福井  
 とは神戸時代の知己であるが、櫻木といふのは  
 は運送業者の大親分某の愛児で、今度津草  
 豹形の成草館を買収して、改築し、国若館と  
 名で初興行するに就き、脚本を書いてくれ  
 といふのであつた。果敢なく自分は快諾した。  
 すゝと十八日は、川上が福井を同行して来  
 て。

中  
17



中  
の

其当館の逸話であつた。

蘇我といふ脚本の前篇だけ脱稿した。此

時分は日露戦争が可なりといふ噂が流れた。

それで、軍事探偵を乞ふといふ大甘物であ

つた。その本讀を国華館ですらといふので、二十日の

夕方上京した。

国華館附の本家茶室の樓上で行ふので、

昨夜は川上一蔵が初めて本郷館でお伽言合を

演じる、その日狐の裁判を岩崎新太郎が讀

み。引ついで本郷館でハムレットを演じ

五

No

4

司貴郎は私のため、午内の脚本を書いた人では

ありませんか。それが軽々しく他人筆を執つ

てくれば困ります。といふ強談判。

福井の方は又、その午内の脚本作家を新

狂言を依頼したといふのが、国華館といふは

景氣のツバネといふ事で、是非どうかと

勧めよう。中々拗まると困つたが、結局

矢張り書いて見る。それが不出来の作で有つ

ても撤回するといふので、一隊落した。

人で生ビールを一樽空にした。

A 10 20 著 三河野路 逸話

裁判の問

No



中

9

る、その山崎の葉が讀むといふので、俳優  
が共通の結果、三芝居の本讀を一時はすこ  
いふのであつた。

到頭夜が明けろつたので、福井等と昔の  
形のだせろ汁で朝の一杯傾けん。

十月十五日、国奉祝初日。一番目は高安月

郊の翻案、キング、リアの闇の光、二番目

が自分の蘇生で、俳優は、村田政雄、中

野信正、兒嶋文衛、酒井政俊、吉永豊次郎、

藤井六輔、藤川岩之助、柴田善太郎、福井茂

A 10 20 書 二 三 四 五 六 七 八 九 十

兵衛等で、蘇生は酷く俗受の(能主代  
理が指ぶ人風の男で、文士と狗笛と眼中の無  
い俳優の、本讀を聴いての急な態度が  
一変して、脚本料を金庫より取出し程  
た。

田村成義の續々歌舞伎年代記

(前巻)二番目は水蔭子が曾て太陽紙上へ

ののたる脚本「書生」にて福井の老漢

夫を扮し充分な芝居を演つて見せ(下巻)

併し之は誤りで、右陽の登載さんなの



中  
20

時間を要するが、  
 取りあへず品川驛へ駐付けると、其折山の  
 手の汽車が入つたので、急いでその汽車無り、  
 新宿で又乗替へて、牛込驛で下車したが、以時  
 品川の同行したのは、紅葉夫人菊子の従妹  
 の良人岸とドクトルであつた。  
 硯友社員は勿論、角田竹冷、長田秋海、齋  
 藤松洲その他が前後して駐付けて来た。  
 紅葉の病床は二階の八畳、我々は階下の  
 一室に詰切つてゐた。看護は菊子夫人を初

乗 兵

其後三十七年の二、三月號であつた。

紅葉逝く

明治三十六年の冬の上

悲しみの極みの日は遂に来た。十月三十日の朝、

紅葉危篤の至急電報が来た。急いで自分は陣

居横町の家を出た。

自<sup>共頃</sup>動車がそれの問題ではふいの品川

の牛込までは、綱実の人力車とくらゐ相当な

A 10 20 青じ 二二回 函館新聞 掲載



中

め親族方が附功りの他は、岩波婦と二人ある。  
 (この内の一人が後の柳川春葉夫人)  
 これの神樂坂藝妓で相模屋の養女である。  
 小五んとりふの枕頭を離れおかつた。(この  
 小五んとりふのは明治二十七年の三月三十一  
 日月初めて紅葉と逢った。それは思葉風谷友  
 い自分との四人で例の吉熊で小集した時分の  
 で。その後一二度会って熊へ呼び、四月二十  
 一日は思葉風谷友が自分との四人連で、相  
 模屋の経営してある喜美川とりふ待合を遊ん

A 10 20 第三 三回 柳川春葉

No.

の代議士と先年物故した。  
 午後二時頃、何時であつたか記憶を失くす。  
 日、到着時目撃者、静かな眼を覗いては好  
 のりうと、いふので、親族側がいきで有つ  
 れらう。それの友人、二階の六畳の方  
 に入つた。そこが二人家組んで、次の間は行  
 文章、教團を遺言した。門を一回を集めて、七、八、九、十、と

No.

天







中  
2了

理由が有つた。それは小波洋行の送別會の  
顔を出さふかつたのを、紅葉が怒つたので。  
眉山の川と来難く成つたのであつた。臨終の  
は無諦致付けて来たので、紅葉は其れ儘氣儘  
に就て最後の忠告を試みた。その時は眉山と泣  
いて服を着た。  
初十一時、遂に眠りに入る。親族、友人門  
の多量の取圍を以て、安んじ、永き眠り  
就いた。自分には時、釋尊涅槃の有様を連想  
せずにはゐられなかつた。

天  
天

No. \_\_\_\_\_

時を書いた手紙の中へ（紅葉の山は入る等  
照し  
（前書）眉山は今世に一會も致さず稀有  
あるはあの男の居る位、如何致し候つ  
りやあんなほどの旧友までありあがり無  
下にあつたきくは有之候  
水落日増に遠々しく相成けや半年近く  
と面會不致（下畧）  
斯ういふ有様で、紅葉晩年の親友は大分変  
つてゐた。（眉山の日は、自分にと違つて、明か  
A 10 20 書山 二阿部新良集

No. \_\_\_\_\_



紅葉のたすけ

明治三十五年の冬

12月

一同悲嘆の極みの中で、門生の某(自分は  
顔だけ知つてゐて、名を覚えぬが、その後一度  
と其男は出會はぬ)窓のノートを取出して  
紅葉の死相を写生してゐるのを發見して、自  
分は憤怒の餘り、政らうとせん。併し、風俗がゆる  
いの止しん。

(紅葉の門下室は極くおごん奴が二三ある。  
故人の日記其他の遺書を讀み出して、  
それと賣却したり、信筆を盛んに書き替へら  
たり、未七人は不敬の言を放つたりしれ某と

11020 海山 三河内家藏書

申  
24

いふのが、最も甚だしいつん。先年死  
志し山里水葉、信筆は、堂に入つて、  
生前の所見あやまれる程であつた。それゆゑ  
小栗風葉を至つては、故人の初七日の夜、某所へ流  
連の結果、馬を奪つて未七人の金を借りて  
来た。其後、紅葉祭を舉行し、たゞの彼は  
遂に一席の酒を飲ませた。その風俗が既に七きんが、  
何れも困窮の海に、いかに、いかに、いかに、  
おけ編の目的ゆゑ、  
早速其式を就て大評定が起つた。會計を任

No

No

奉天



仲  
21

一、おのこ  
 遺言を破るゝといふ事は何事か  
 忍ち之で醫務送りと決定した  
 死の前夜は紅葉は非常の興奮して、声を厲  
 しくして何事をやらぬと叫しんとし、事を自  
 分は風谷の聴いた、それは併し解決して  
 故人の字の眠つたと聴いた  
 その他葬送の打合せが一應終了して  
 一同一イキ吐いたのは午前二時頃であつた  
 午後、自分も興奮の餘り、

香 香

No.

として丸固れ葬があつた。  
 故人の遺言として「自分の野山送りの  
 先輩世他知友がワザく来て下さるゝ、森  
 棺で擔がれて、女をより高々と行くは忍びな  
 いから、醫務で葬式を出して貰ひ」といふ  
 のであつた  
 あの親戚側で、醫務葬では見ツともい  
 からは是非森棺といふ事であつた。  
 すると、佛然として久我順之助(おのこ)故人とは少  
 年時代からの友(おのこ)之を玩んで。

A 10 30 香 香 二三四五 香 香

No.



(無防衛の執筆)  
 一 議論より  
 実行も教の執筆  
 一 それを向して  
 批評家の攻撃は  
 蜚言一てるといふ

「能く我々は軟弱な心、これほどは、  
 士魂として文壇に...と絶叫して泣き出す  
 うはるゝんふかしの。正しく自分は士魂を失  
 つた。敗兵の様ふ氣持を痛切に感得した。ゆゑ  
 有つた。」  
 儀式的湯灌の他は、屍骸の始末は就ては、  
 本陣病院長と武内桂舟とが主と成つて、看護婦  
 を指揮して充分に行つた。萬一遺漏が有つて  
 は醜態なりといふが、桂舟は素裸にな  
 りて詰り物ふど念入りするにやあつた。  
 成つて、寧ろ其他の

A 10 26 青山 二河原 宗太郎

中  
26

自分は三十一日の午前中に帰宅して、十二月  
 一日の午後八時半に出道して行つた。雨が  
 降つてゐるが、夜に入つて月があらぬ。  
 此間、遺言通り、帝国大学に於て、三浦博士  
 執刀の下に解剖の附せられたが、胃の他に幽門  
 より痛を生じて多く、<sup>喜心外</sup> 胃の他に幽門  
 のとらふ。脳量も多く、生理的超る佳  
 良、云々。その脳は大いに保存されてゐる。皆  
 立會人として武内桂舟、岡田朝太郎其他が同  
 行してゐた。

宗太郎



仲  
27

お通夜は非学な躰けつん。知名の文士畫家  
ふど、少のりず、小波は曉方一す一種しやうとく土某所  
が無いのなま戸棚は隠れて寝たのは好いが、そ  
の中は自分が翌日の禮服を入らして置かれたの  
で、そのを下敷きとして、~~敷~~敷き4や2さん  
のりやは開孔して

自分としての失態は、夜更けでの雑談中よ  
うて、乙羽の園遊會はげ山田寒山が賣ト  
者、假裝して人の今の形を覚えてる間、角  
田竹冷が来たので、寒山それを知つての知る

A 10 20 青じ 三回國語同窓

No.

ずい、貴郎は女難の相がある云々。その時  
の滑稽を語り掛けたと、長田秋波がイキナリ  
笑ひ出した。それと並行、当の角田竹冷が其  
所を立つて来たので、自分は上げり下げり  
ふが目を白黒させた。

この翌朝、通夜の明進軒といふ故人の堂  
しん海倉を、社中揃つて行く朝、食をいん  
へこのは食事は皆自辨といふ定めがあるので  
~~横田~~  
つれ。通夜で酒を出さふか、つれ様は記さす

No.

五  
天  
卒



平内先生の存倒

明治三十七年の冬

てる。

紅葉の死に就て各新聞は

密にその死の模様を細く報道する

たので、茲には主として、自由中心で記載する

が、贈死其他は可成り長くつづいた。棺側は

は門を連ね左右に別れて従つたが、其中は男

物を放つたのは、瀬沼夏葉女史で、この人は

ニコライ神学校の教師瀬沼某の夫人で、露国

文学に通じ、その翻譯を故人を示しおどして

る。

A 10 20 青い 三三三三三三三三三三

中

硯友社員は直ぐ棺後をつづいた。金葬者は

一人を残らず徒歩で青山の齋場まで附随した。

高田先生おどし無端であつた。

思案が行列整理の任に當つて、皆二列に並

んで下す。と無遠慮な語つたが、皆

その通りをして居た。自分は柳浪と並んで

行つた。

川上喜二郎、藤澤誠二郎の二人が通寺所の

途上で黙送して居た。行列が神樂坂を降り、

塙端を進行中は、陸軍持槍が騎馬で通行し樹

No

No



中  
29

~~~~~~~~~

当然(当然)會葬者中は存倒者を生じた。それは坪内逍遙先生であつた。早速塚外へお連れした。一時は皆吃驚した。(腦貧血を起さんか?)  
次郎(次郎)と竹治(竹治)宗正(宗正)が、私(私)會を代表して追悼文を讀んだ。この時(この時)も~~~~~~~~~泣きながら有つた。

門弟を代表しては鏡花(鏡花)が讀んだ。自分は長年(長年)、多くのお世話(お世話)を蒙りしれり。

不 不 五

つて、馬の暴れる鎮め切んが、一寸行列を乱した事がある。  
日(日)森(森)鷗外(鷗外)が、馬(馬)で紅葉(紅葉)の行列を攪乱(攪乱)した。と某新聞(某新聞)の記載(記載)したのは、全くの無根(無根)で、前記(前記)の軍人(軍人)を鷗外(鷗外)は驚(驚)りそつたのである。  
青山(青山)嘯(嘯)場(場)は立錫(立錫)の地(地)も無いので、會葬者(會葬者)の詰め(詰め)てある。  
硯友社(硯友社)の追悼文(追悼文)は、眉山(眉山)が書いて、思案(思案)が讀ん(讀)ん(讀)んが、途中(途中)の(の)嗚咽(嗚咽)して、切々(切々)聴(聴)く(く)と思(思)ひ(ひ)が、會葬者(會葬者)も亦(亦)多く(多く)涙(涙)流(流)した。

A 10 20 清山 三河原紙屋製

No



中  
3

十六日、芝居葉館で、紅葉祭を挙行する事を  
決議した。

その十六日は、世が思一博士、岡田朝太郎  
博士、角田竹治宗匠等の自傳演説があり、餘  
興り紅葉を因むるを教へ出した。参加者  
は、三百名に上った。

この年、私は自分として殊に悲愴であつた。  
川上から託されてゐた。日エ、十二日の紅葉脚  
本を、更に藤澤雪の依頼して、其評釋を聞き  
の何と題して一冊の纏めて、文藝の裏

平 平 平

No. \_\_\_\_\_

A 10 20 青い三回紙因葉

十一月四日、尾崎家に行き、硯友社中集ま  
つて、いろいろ協議をせし中で、小波の葉で、  
西洋風な故人の誕生日を記念すべく、十二月  
見て好いものである。

紅葉祭の目的は、故人の徳望の現けと  
見て好いものである。

十一月四日、尾崎家に行き、硯友社中集ま  
つて、いろいろ協議をせし中で、小波の葉で、  
西洋風な故人の誕生日を記念すべく、十二月

No. \_\_\_\_\_



つれのやの少年のやの中学の短編を送つ  
 りのて、越さんぬ年を越さんぬ年を越すとい  
 ふ狂歌通り、そのてを、~~家~~家は伊藤の書  
 林念川の二人が居り、例のズーラ車として  
 狂社、<sup>水谷</sup>花、高橋佛骨、其他が、<sup>見えてる</sup>おど毎日の如く  
 指をさすてる、<sup>て</sup>表画は控りて、<sup>見えてる</sup>おど毎日の如く  
 事、<sup>三十七年</sup>三十七年、そのを何して、<sup>おど</sup>おど  
 の、金く足当が所がぬのを有つた。  
 (っく)







